

東京日々新聞

八百七十七号

深川西六間堀餅屋渡世
昔浦與吉と云ふ者久く病ひの床より
ちりり其妻といふ本年廿五才と云ふ名小背りす

一て深り安らふ水性少く夫の甘も鼻に附きつり
小籠鹽田兼吉と人目忍びて寐の子餅契る数さへ重ね着る
夜の夜の度重々若も本夫の全快あまば二人り中の自在餅
此快樂へ逐げしむに唯こ枯るる昔浦與吉毒害るるんと膽太くも
二人りの法と云ふるを薬出瓶へ配劑の毒あつるを此病者もやらゆる
飲むる否鼻早口眼より血を吐て怒ら没命為しけり内工喜み
表へ患ひ形の如く野送り誰と憚りの閑守も泣真似
あせりが發覺し遂に警視の文廳へ呼ばせり

萬齋芳樂



山々々々人誌
Ⓜ 嚴しく糾問あり
と云ふあり一決第
と白状せしる本月
九日東京裁判所へ
送致せらる

人物
貝足屋

渡辺彰栄